第 4 回 SPARC Japan セミナー2018

「人文社会系分野におけるオープンサイエンス ～その課題解決に向けて～」

開会挨拶/概要説明

鈴木 親彦
(国立情報学研究所 /
データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター)

鈴木 親彦
2018年度SPARC Japanセミナー企画ワーキングメンバー。
情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）および国立情報学研究所（兼務）特任研究員。美術史学・文化資源学・人文情報学を修め、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学後、2017年より現職。研究対象は情報学の成果およびオープンデータの人文学への応用。現在は特にIIIF画像の活用に重点を置いている。
https://researchmap.jp/chsuzuki/

本日は第 4 回 SPARC Japan セミナー「人文社会系分野におけるオープンサイエンス～その課題解決に向けて～」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

第 4 回セミナーの趣旨

SPARC Japan セミナーでは、既に 2013 年、2015 年に、人文学系または社会学系の分野に関するオープンアクセスのセミナーを開催してまいりました。その際に、人社系分野が他分野、特にオープンアクセスが進んでいるような分野とどのような違いがあるか、また分野特有の課題はどこかという点についてはある程度共有できているのではないかと考えています。

昨今、国内でも人社系のジャーナル、データのオープン化につながる動きは非常に増えてきました。日本学術振興会では 2018 年から「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築プログラム」が実施され、特に社会科学におけるデータ基盤整備への取り組みが期待されています。また、情報・システム研究機構のデータサイエンス共同利用基盤施設では、人社系においては社会データ構造化センターおよび人文学オープンデータ共同利用センターが、データ駆動型研究を促進するための支援を開始しています。これまでもさまざまな分野で人社系データの整備またはオープン化が進んでおりましたが、今、一層の基盤整備が期待される状況だと考えています。

一方で、過去の SPARC Japan セミナーで指摘された、人社系には学問固有の課題があって、そのニーズに応じた形でなければオープン化はなかなか進まないのではないかということに関して、その解決方法はいまだにそれほど明確にはなっていません。人社系ではジャーナルと同様、またはそれ以上にモノグラフが重要である場合もあり、研究成果は機関リポジトリへの搭載も進んでいますが、いわゆる通常の商業出版で公開されることも多く、必ずしもオープンな動きと相性が良いとは限らないということもあります。また、研究成果の多くが大手の総合学術雑誌ではなく、個別の紀要、個別の学会誌で発信されることも多いです。J-STAGE や機関リポジトリでの公開が増えてはいるものの、そ

の役割の担い方も変化しています。

このような状況において、人社系のオープンサイエンスの定着に向けて、改めてこの分野の置かれている状況を具体的に確認し、課題を共有する必要があるとわれわれは考えています。本セミナーでは、データインフラの構築、モノグラフのオープン化、そして紀要のデジタル化という具体的な実践事例を取り上げ、解説を交えながら最新の状況を共有しつつ、議論を行いたいと思います。

課題解決に向けて

今回のテーマでわれわれが最も重要だと考えているのは、サブタイトルである「その課題解決に向けて」という点です。人社系のオープン化については、これまでの回で問題点の指摘や状況の共有等が行われてきました。今、はっきりした動きが多数生まれてきているという前提に立って、セミナーにご参加いただいた皆さまにも、自分の関係する範囲でこの課題解決に向けて具体的に動きを取ってもらえるような、少なくとも何が必要かを考えていただけることを目的としています。

そのための具合的な情報として、登壇者の皆さまに講演いただいてディスカッションを行っていこうと考えています。課題解決に向けて動きだすために、皆さま、どうぞご協力をお願いします。